

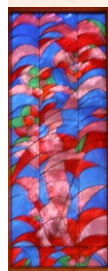
さばく しりぞ  
「砂漠に退く」

2月22日、灰の水曜日をもって私たちは四旬節に入ります。—そのことを意識せずには時間を過ごすかそれとも「四旬節」という言葉を通して響く呼びかけに耳を傾け、それに応えようとするか。それは自分次第です。



\*「四旬節」は忙しい毎日の生活という「時」の流れの中で、一旦停止することを呼びかけていると思います。現代社会と世界を見て思うことですが、私たち一人ひとりにとって、人間として、イエス・キリストの弟子として

生きるために、アクセルばかりではなく、ブレーキを踏むことも必要です。高速道路にも緊急停止のための車線があるように、私たちの生活の中でも、このような「空間」を作ってみてはいかがでしょうか。—歩んだ道を振り返るため、どうして何のために自分が生きているのか。何に向かって走っているのか。イエス・キリストの弟子としての自分の生活はどうなっているのかなどのことについて自分の生き方を問いかけるために、「間を置いて」聖霊に導かれて、静かに神が私たちに求めておられることを新たに確認することは、非常に大切なことだと思います。



\*「四旬節」。きっと多くの方の頭には、「犠牲の時期」と連想することでしょう。確かにこの時期になると、教会の中で、「犠牲」という言葉は頻繁に使われていますが、ここでは「砂漠に退く」としての

「四旬節」について考えていただければと思います。—その言葉の背景に、イスラエルの民の歴史(シナイ半島での40年間の生活)があることを皆さんも覚えておられることでしょう。また、イスラエルの預言者(エリア)、洗礼者ヨハネ、イエスも度々「砂漠」「荒野」「人里離れた所」に退いたのです。神に出会い、神の思いを知り、自分に与えられた使命について考えるためです。—祈る内に—。



\*「砂漠」。果てしなく続く、石だらけ砂の海とも言える地。このような所にいると、人は自然の尊さと偉大さを味わいながらも、同時に、自分がいかに小さい者で無力な者であるかを感じます。そこで、素朴な生活しかできないために、生きるには何が本当に必要かを考え、孤独を感じるために、人と関わる喜びの値打ちを覚え、沈黙を経験するために、人の声のありがたさを人が一層意識するのです。

\*「砂漠に退く」。それは決して周りのことや人々との縁を切るためではありません。人との関係を打ち切りたいどころか、今から後、もっと充実した出会いを求めているからです。「間を置くこと」「離れること」が目的ではありません。目的はもっと豊かな関係を結ぶことです。神に対しても、人に対しても。

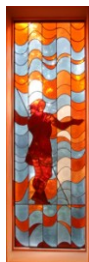
\*街のけたたましい騒音に埋められると、神の声も、人の声も聞けなくなってしまいます。逃げるために「砂漠に退く」のではなく、騒音の中に美しいメロディーを聞き取ることができるために、新たに心

の耳を澄ますためです。エリア預言者と同じように(列王記上19章 11～15)。—今も神は私たちに声をかけています。その声を聞き取るために自分の内に静けさを取り戻すことはどうしても必要です。

\*「四旬節」はその努力に最も相応しい時期だと思います。今年の「四旬節」も私たち皆にとつて恵みに満ちたひと時となりますようお祈り致します。

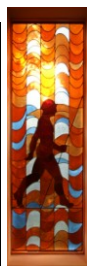
思いがけない訪問者(5)

\* 36・39・40・41・44号参照



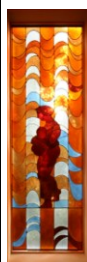
どうもすっきりしない。朝から不愉快なことが頭から離れずに、何となく空しい一日を過ごしたという心境だ。苛立ちのせいかわかりませんがとにかく侘しい夜だ。テレビの番組までつまらなくて…。

「とんとん」。目を上げると、窓の外から覗いているその「人」の顔が見えました。久しぶりの再会だというのになかなか歓迎のムードが湧いてきません、しかし懐かしさのためか、かすかに微笑みながらドアを開けました。挨拶を交わしてから、その「人」はソファーに座り、さりげなく話し始めました。「人間って面白いものですね。無意識の内にも『自分』が『かわいい』とどこかで思っているあまり、いざとなつてうまくいかず気にいらぬことを言われると『自分』が『かわいそう』とつい思いこんでしまいますよね」と。そしてにっこり笑って、「きっとくだらない言葉遊びだと思おうでしょうね」と付け加えました。



「駄洒落にすぎないもんだ」と思いながらも一風変わったことを指摘された感じがしました。しばらくの間、二人とも沈黙を守りました。「自分ね、

『自分』って一体何だろう」と私が問いかけるとその「人」は謎めいた言葉で答えました。「君の本当の『自分』は鏡の向こうにある」と。目をつむっていたその「人」の顔を見つめながら「よくわからない」と私はつぶやきました。「今日はずいぶん鈍いですね。『自分』を見る時のその鏡、他人が『君』を見る時のその鏡、両方とも変形した鏡ですよ、その向こうを見なさい」とその「人」は言った。突然不機嫌になった私は「その向こうには何があるというの」とやり返すと、「その向こうには神の目がある。本当の『自分』はそこに映っているんですよ。」と静かにその「人」は私を諭しました。その時にふと、イエスのある言葉が頭を過ぎり、聖書のページをめくり始めました。その「人」は私の肩に手を載せてひそひそと耳打ちしました。



「ルカによる福音書12章 12節から32節まで」と。2月22日から始まる四旬節の間にその言葉をゆっくりと黙想しようかと思い、頭を上げると、もうその「人」は消えていた…。

不思議なことに、特に理由もなく私の肩に手のぬくもりのようなものを感じました。「どうしたことか」と思いながら、テレビを消して、心静かに布団に入りました。

